

# 2022年の大学卒業生 進路決定率85.0%！

前年比で0.8%増！  
進学者0.2%増、就職者0.5%増！

旺文社 教育情報センター 2022年12月1日

旺文社では、大学へのアンケートを基に『大学の真の実力 情報公開BOOK』を刊行している。その卒業生データを基にして2022年の卒業生の進路決定率を分析した。本年の進路決定率は85.0%。前年の84.2%からやや上昇した。

◎『大学の真の実力 情報公開BOOK』（旺文社／2022年9月刊）の調査データに基づく。

◎調査データは2021年4月～2022年3月までの大学卒業生の、2022年5月1日現在の情報。

◎学部系統分類は、旺文社の分類に基づく。

◎本稿での進路区分の基準は次の通り。

・「進学者」＝大学院研究科、大学学部、短期大学本科、専攻科、別科へ進学した者。

・「就職者」＝自営業主等と無期雇用労働者の合計。

（注）本稿では、有期雇用労働者（雇用契約期間1か月以上の者）・臨時労働者（雇用契約期間1か月未満の者）は就職者に含めていない。文部科学省『学校基本調査』が示す「就職者」、旺文社『大学の真の実力 情報公開BOOK』に掲載の「就職者」とは基準が異なる。

・「臨床研修医」＝医学科、歯学科の卒後臨床研修医。

・「その他」＝「専修学校・外国の学校等入学者」「進学準備中の者、就職準備中の者、その他」「不詳・死亡の者」。

## ■「進路決定率」——就職率だけではわからない卒業後の進路状況を数値化！

まず、進路決定率の定義について説明したい。本稿では以下の式で計算した。

$$\text{進路決定率（\%）} = (\text{進学者数} + \text{就職者数}) \div \text{卒業生数} \times 100$$

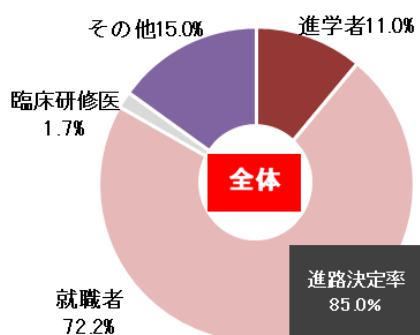
※就職者数に臨床研修医を含む

進路の決定率に関する計算式は、記事によってさまざまである。計算に使われる数値は、就職者数、就職希望者数、進学者数、卒業生数などがあり、就職率を考察する記事もよく見られる。本稿では進学した者も進路が決定したとみなし、進学者数を就職者数と合わせて計算した。就職者数には臨床研修医も含む。

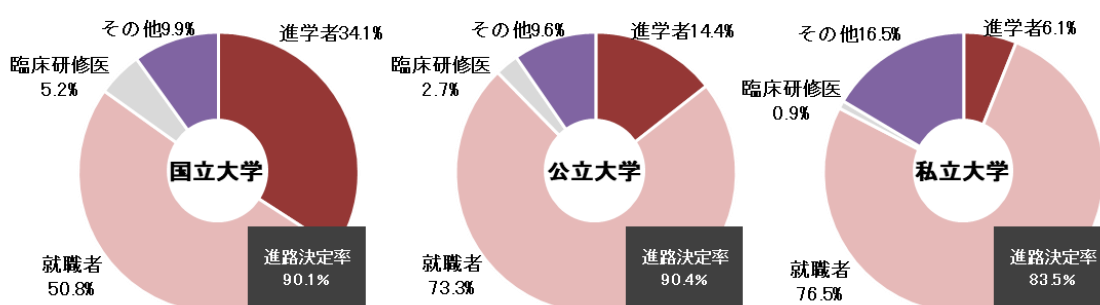
本稿では、就職者とは自営業主等と無期雇用労働者が該当する。有期雇用者と臨時労働者は含めていない。

また、分母は就職希望者等ではなく、客観的な数字として卒業生数とした。

【図表 1】 国公立大学別の進路決定率



※国立大学 80 校 477 学部、公立大学 89 校 207 学部、私立大学 564 校 1789 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。



### ■進路決定率 85.0%！ 前年比で 0.8 ㊦上昇

本年の進路決定率は 85.0%となった。

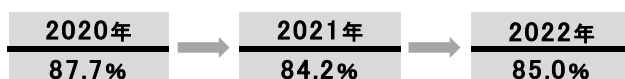
設置者別に見ると、国立大学は進学者の割合も大きく、卒業者のおよそ 3 人に 1 人は進学した。また、臨床研修医の割合も比較的高い。

公立大学は設置者別では最も高い進路決定率となった。

私立大学は就職者の割合が高く、76.5%。設置者別では私立大学の学生が最も多いので、全体の傾向と私立大学の傾向は似たようなものになる。

2020 年から 2022 年までの進路決定率の推移を見てみると、図表 2 のようになった。2020 年から 2021 年は進路決定率が 3.5 ㊦低下したが、2022 年は 0.8 ㊦上昇した。2020 年から 2021 年にかけては、進学者がやや増えた一方、就職活動に苦戦した状況があった。2021 年から 2022 年にかけてはどうだったか。次のページの図表 3 に表した。

【図表 2】 進路決定率 直近 3 年間の推移



### ■進学者、就職者ともに割合が増

2021年と2022年の違いを少し細かく見てみる(図表3)。前年と比べ、進学者が0.2ポイント増、就職者が0.5ポイント増となった。その分、その他がダウンしたという構図だ。明確に進路を決められた大学生の割合が、前年比でやや増加した。

[図表3] 進路決定率 前年との比較

| 全体    | 2021年 | 2022年 |
|-------|-------|-------|
| 進路決定率 | 84.2% | 85.0% |
| 進学者   | 10.8% | 11.0% |
| 就職者   | 71.7% | 72.2% |
| 臨床研修医 | 1.7%  | 1.7%  |
| その他   | 15.8% | 15.0% |

### ■国公立大学は進路決定率90%以上の学部が多く、私立大学は80~90%の学部が多い

図表4は進路決定率のゾーン別の学部数である。国立大学は、進路決定率90~100%の学部が多く、進路決定率が低い学部は少ない。

公立大学もほぼ同様で、進路決定率が80%を超える学部がほとんどだ。

私立大学は進路決定率80%以上の学部が約7割の一方、80%未満の学部も少なくない。

### ■男子は進学者の割合が高く、女子は就職者の割合が高い

進路決定率を男女別に見てみると、男子が84.9%、女子が85.0%で、進路決定率には大きな差はなかった(図表5)。ただ、内訳を見ると、男子のほうが進学者、臨床研修医の割合がやや大きい。一方、女子は就職者の割合が大きい。

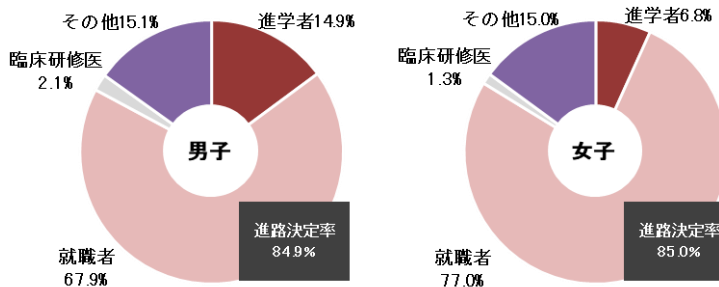
次ページの図表6は卒業者を文系・理系に分け、さらに国立・公立・私立に分けて分析したグラフだ。国立大学理系の進学者の多さが目を引く。図表3で、卒業生全体で前年との比較を示したが、図表6のように細分化してもやはり全体と同様に進路決定率の上昇が見られた。文系は国立大学のみ前年同様の進路決定率で、公立大学は1.4ポイント、私立大学は1.1ポイント上昇した。理系は、国立大学は0.1ポイント、公立大学は1.0ポイント、私立大学は0.6ポイント上昇した。

[図表4] 国公立私立大学別  
進路決定率ゾーン別の学部数

| 進路決定率                 |          | 国立大学<br>90.1% | 公立大学<br>90.4% | 私立大学<br>83.5% |
|-----------------------|----------|---------------|---------------|---------------|
| 進路決定率<br>ゾーン別の<br>学部数 | 90~100%  | 284           | 139           | 491           |
|                       | 80~90%未満 | 143           | 51            | 715           |
|                       | 70~80%未満 | 35            | 8             | 369           |
|                       | 60~70%未満 | 10            | 6             | 135           |
|                       | 50~60%未満 | 4             | 1             | 49            |
|                       | 50%未満    | 1             | 2             | 30            |

※国立大学 80校 477学部、公立大学 89校 207学部、私立大学 564校 1789学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

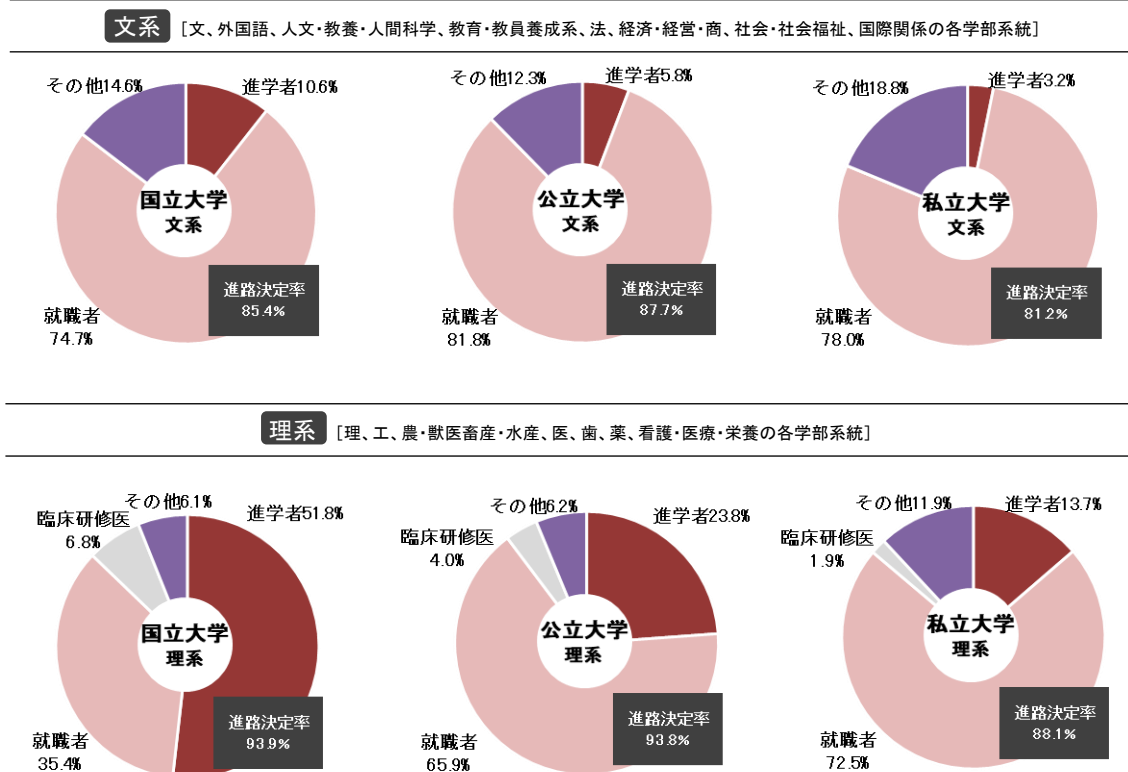
[図表5]  
男女別の進路決定率



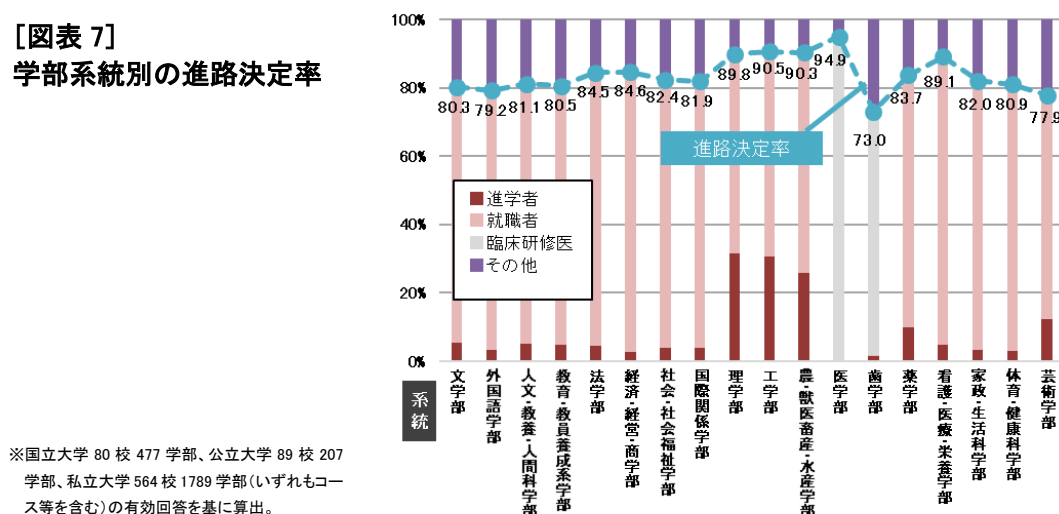
※国立大学 80校 477学部、公立大学 89校 207学部、私立大学 564校 1789学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

**[図表 6] 国公立大学別  
文系・理系別の進路決定率**

※国立大学 80 校 477 学部、公立大学 89 校 207 学部、私立大学 564 校 1789 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。



**[図表 7]  
学部系統別の進路決定率**



**■今年も理、工、農・獣医畜産・水産、医、看護・医療・栄養学部の決定率の高さは変わらず**

進路の決定率は学部系統別に見ても、ある程度傾向が見られる。図表 7 のように、進路決定率が全体の進路決定率 85.0% を超えた系統は理、工、農・獣医畜産・水産、医、看護・医療・栄養の各系統。また、理、工、農・獣医畜産・水産の各系統は進学者の割合が大きい。これらの学部系統は男子が多く、前ページの図表 5 で、男子のほうが女子より進学率が高い

ったことと関連している。

前述のように全体では前年の進路決定率 84.2%に対し、本年は 85.0%と上がっており、学部系統別に見ても、ほとんどの系統で上昇傾向が見られる。前年と比較した結果が図表 8 である。下がったのは歯、薬の 2 系統のみであった。芸術、外国語、国際関係学部系統などで大きな上昇が見られた。

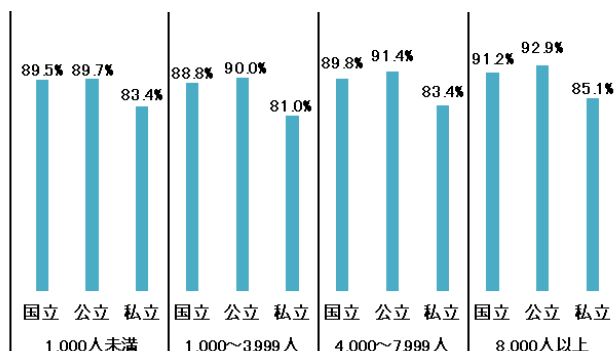
### ■進路決定率は大学によりさまざま

図表 9 に大学の規模別（収容定員別）、国公立立大学別の進路決定率を示した。前年同様、規模が大きい大学のほうが進路決定率が高い傾向にある。ただし、当然ながら個々の大学を見ていくと例外もある。大規模でも進路決定率が 50%を切る大学もある一方、小規模でも高い進路決定率だった大学もあるなど、大学によりさまざまである。

[図表 8]  
学部系統別の進路決定率 前年との比較

| 学部系統        | 2021年 | 2022年 | 前年からの増減  |
|-------------|-------|-------|----------|
| 文学部         | 79.4% | 80.3% | 0.9ポイント  |
| 外国語学部       | 77.9% | 79.2% | 1.3ポイント  |
| 人文・教養・人間科学部 | 80.0% | 81.1% | 1.1ポイント  |
| 教育・教員養成系学部  | 79.6% | 80.5% | 0.9ポイント  |
| 法学部         | 83.4% | 84.5% | 1.1ポイント  |
| 経済・経営・商学部   | 83.7% | 84.6% | 0.9ポイント  |
| 社会・社会福祉学部   | 81.7% | 82.4% | 0.7ポイント  |
| 国際関係学部      | 80.6% | 81.9% | 1.3ポイント  |
| 理学部         | 89.2% | 89.8% | 0.6ポイント  |
| 工学部         | 90.2% | 90.5% | 0.3ポイント  |
| 農・獣医畜産・水産学部 | 89.1% | 90.3% | 1.2ポイント  |
| 医学部         | 94.4% | 94.9% | 0.5ポイント  |
| 歯学部         | 76.1% | 73.0% | -3.1ポイント |
| 薬学部         | 84.6% | 83.7% | -0.9ポイント |
| 看護・医療・栄養学部  | 88.8% | 89.1% | 0.3ポイント  |
| 家政・生活科学部    | 81.2% | 82.0% | 0.8ポイント  |
| 体育・健康科学部    | 80.3% | 80.9% | 0.6ポイント  |
| 芸術学部        | 76.2% | 77.9% | 1.7ポイント  |

[図表 9]  
大学の規模別（収容定員別）の  
進路決定率



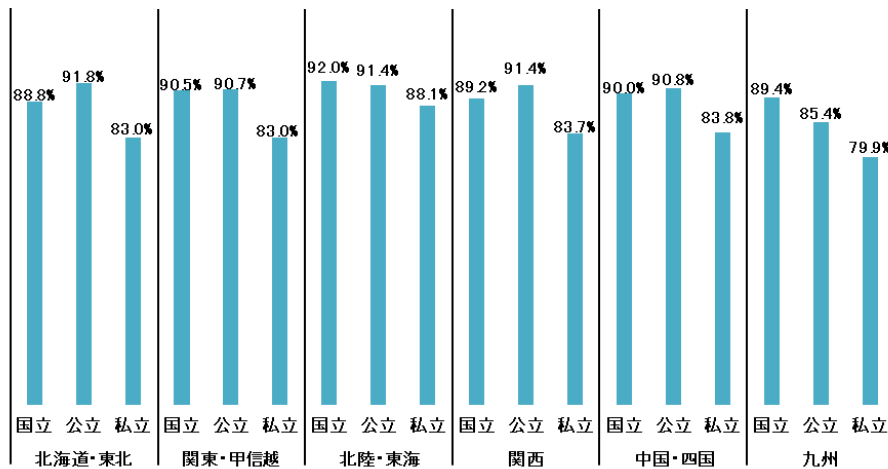
※国立大学 80 校 477 学部、公立大学 89 校 207 学部、私立大学 564 校 1789 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

## ■エリア別では北陸・東海エリアが高い数値を記録

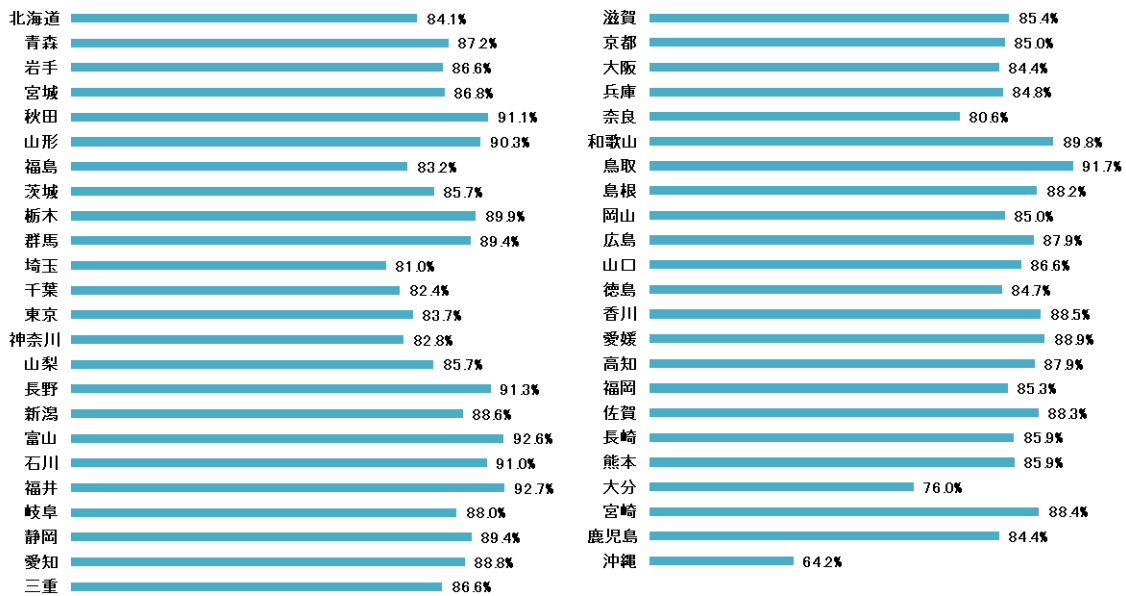
図表 10 と 11 では、エリア別と都道府県別の進路決定率を示した。例年通り、北陸・東海エリアや、そこに所在する県の進路決定率は高い。この地域で、求人等が活発であることをうかがわせる。ただし、当該エリアにある大学が、国公立大学が多いか、あるいは私立大学が多いかなどの事情にも左右されることには留意したい。個々の大学については各大学のホームページや、弊社『大学の真の実力 情報公開 BOOK』などを参照されたい。

**[図表 10]**  
エリア別の進路決定率

※図表 10、11 は国立大学 80 校 477 学部、公立大学 89 校 207 学部、私立大学 564 校 1789 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。大学の本部所在地で集計。

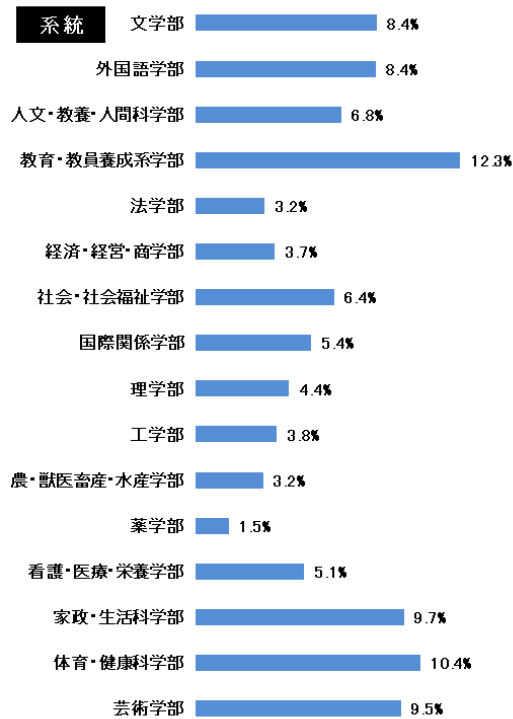
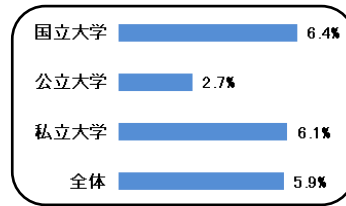
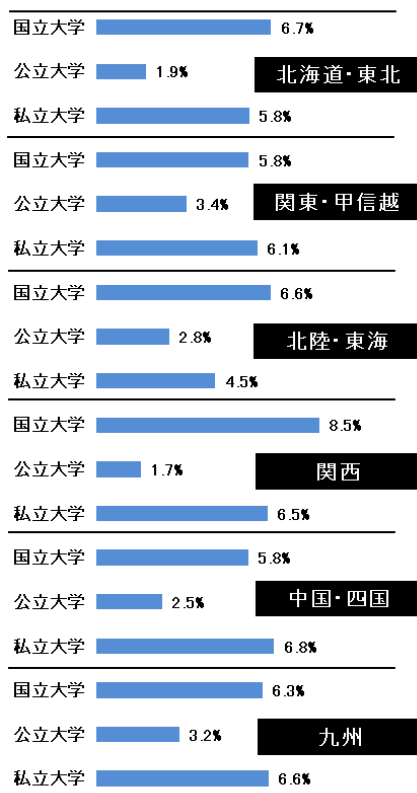


**[図表 11]** 都道府県別の進路決定率



**[図表 12]**  
**有期雇用労働、臨時労働に就いた者の割合**  
**(国公立大学別／エリア別／学部系統別)**

※(有期雇用+臨時労働)÷  
 (自営業+無期雇用+有期雇用+臨時労働)で算出。



※国立大学 80 校 477 学部、公立大学 89 校 207 学部、私立大学 564 校 1789 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

**■有期雇用労働・臨時労働に就いた者は、前年比で0.3 ㊦低下**

図表 12 に、大学卒業後に雇用契約期間の定めのある職に就いた者の割合を示した。有期雇用・臨時雇用の割合は前年 6.2%だったのに対し、本年は 5.9%と 0.3 ㊦低下した。

設置者別では、公立大学で有期・臨時の割合が小さい。

学部系統別に見ると、教育・教員養成系学部で有期・臨時の割合が大きい。臨時教員として採用された学生が多いことが見て取れる。

コロナ禍の影響からか、2021 年は進路決定率の低下が見られたが、2022 年は上昇した。労働人口の減少により、企業等にとっては働き手の確保が厳しさを増しているといった論調も見られる。卒業後の進路に関してどのような傾向になるか、今後も要注目である。

(2022. 12 今村)